



Hi-Res Music Label since 2007
URL <http://unamas-label-jp.net/>
TOKYO Japan

UNAHQ Souvenir de Florence アルバム情報



UNAMAS Strings Septet プロフィール

Jun Tajiri (Vn1)

7歳よりヴァイオリンを始める。本間美子、故久保田良作各氏に師事。1988年桐朋学園大学を卒業。卒業と同時に群馬交響楽団に入団、在籍中は首席代理奏者を務める。群馬交響楽団とコンチェルトの共演やリサイタルを開催するなど主に群馬県を中心にソロや室内楽の活動もする。1994年“プラハの春”国際音楽祭、ウィーン芸術週間に参加。1994年首席奏者として東京交響楽団に入団。皇居内の桃華楽堂において御前演奏するなど東京交響楽団ともソロを共演。1998年同団のアシスタントコンサートマスターに就任。2002年NHK FMリサイタルに出演。2004年にシリウス弦楽四重奏団を結成。東京交響楽団弦楽四重奏団としても光が丘IMAホールでのシリーズを展開。他にもスタジオミュージシャンとしてもCMや映画音楽などの録音にも携わりその活動は多岐にわたっている。

Shiori Takeda (Vn2)

1988年生まれ。

2010年東京藝術大学音楽学部器楽科ヴァイオリン専攻卒業。京都芸術祭「世界に翔く若き音楽家の集い」京都市長賞受賞、全日本学生音楽コンクール、日本クラシック音楽コンクール、横浜国際音楽コンクール、ルーマニア国際音楽コンクール等数々のコンクールに上位入賞を果たす。大学在学時より、ソロ・オーケストラ・室内楽での活動の他、多数の著名アーティスト楽曲レコーディングやライブサポート等様々なフィールドで活動。自身がリーダーを務めるストリングスでの活動も多数。2012年より東京交響楽団ヴァイオリン奏者としてのキャリアをスタート。現在プロオーケストラ奏者としての顔の他に、その経験を生かした多彩な音楽活動を展開している。2014年UNAMASレーベルよりハイレゾリリリースした「Four Seasons」では弦楽4のリーダーとしてロングセラーアルバムとなる。UNAMASレーベルのアルバム制作では、それ以降キーメンバーとして活躍。

Atsuko Aoki (Va1)

桐朋学園大学、洗足学園音楽大学ソリストコースにて学ぶ。ヴァイオリンを藤井たみ子、故東儀幸、原田幸一郎の各氏に、ヴィオラを岡田伸夫氏に師事。第15回宝塚ベガ音楽コンクール、第2回名古屋国際音楽コンクール、第2回東京音楽コンクールにて、それぞれ第1位を受賞。倉敷音楽祭、ヴィオラスペース、サイトウキネンフェスティバル、東京のオペラの森等に出演。これまでにソリストとして東京交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団と共演している他、2012年にはオペラシティ主催リサイタルシリーズ「B→C」に出演。またヴェーラ弦楽四重奏団のメンバーとしてベートーヴェンの弦楽四重奏曲ツィクルスに取り組むなど、室内楽の分野でも積極的な活動を続けている。現在、東京交響楽団首席ヴィオラ奏者。

Kyoko Syoda (Va2)

東京都出身

ザルツブルク=モーツァルト国際室内楽コンクール2013第1位。2015年別府アルゲリッチ国際音楽祭、小澤征爾音楽塾に出演。17年に桐朋学園大学音楽学部卒業。これまでにヴァイオリンを石井志都子氏、ヴィオラを佐々木亮氏に師事。

Ayumu Kuwata (Vcl)

土浦市に生まれる。3歳よりヴァイオリンを、8歳よりチェロを父、桑田 晶に手ほどぎを受ける。東京音楽大学付属高校を卒業後、同大学専修科コースを経て1987年にウィーン市立音楽院に留学。同地にてリサイタルを開催する他、オランダ放送TVに出演。第10回霧島国際音楽祭にて特別賞を、イタリアのキジアーナ音楽院にて特別名誉賞を受賞。1991年に帰国。群馬交響楽団及び新星日本交響楽団(現東京フィル)の首席奏者を歴任

し、定期演奏会等にてソリストとしても度々出演する。第68回日本音楽コンクール作曲部門の作品演奏に対して委員会特別賞を受賞。読売日響、東京都響、新日本フィル、大阪フィルなどの客演首席奏者を度々務める。1999年よりNHK交響楽団のチェロ奏者に就任し、現在は次席奏者を務めている。室内楽奏者として、またN響のチェリスト4人で結成された[ラ.クアルティエーナ]のメンバーとして10数枚のCDをリリースしている他、ソロ小品集《ヴォカリーズ》《メロディー》の2枚をリリースし、いずれも高い評価を得ている。

ペーター シュミードル、ヴォルフラム クリスト、アリス 沙良 オット、チョーリャンリン、中村紘子、清水和音、などの国内外の著名な演奏家と数多く共演する他、フィリップグラスのチェロ協奏曲を日本初演するなど、ソリストとしても活躍している。これまでにチェロを堀了介、J.バイロフ、D.シャフランの各氏に、室内楽をR.ブレンゴラ氏に師事。

Yukinori Kobatake (Vc2)

東京藝術大学卒業。同大学院修士課程修了。これまでに間瀬利雄、金木博幸、荻田雅治、山崎伸子、藤森亮一の各氏に師事。小澤国際室内楽アカデミー参加。東京フィルハーモニー交響楽団委託契約団員チェロ奏者を経て現在、ソロ活動、室内楽オーケストラ、レコーディング等幅広く活動中。

Ippei Kitamura (Cb)

埼玉県出身。2002年東京藝術大学器楽科卒業、05年同大学院修士課程修了。在学中、別府アルゲリッチ音楽祭に参加。2005年、ガウデアムス音楽祭（オランダ）参加、JULIAN YU作曲PENTATONICOPHILIAにてソリストを務める。2006年小澤征爾音楽塾Ⅶ「復活」に参加。コントラバスを永島義男、黒木岩寿、西田直文、山本修、石川滋の各氏に師事。オーケストラから吹奏楽、スタジオワークやミュージカルまで、幅広く活動。東京藝術大学管弦楽研究部非常勤講師を経て2006年に東京交響楽団に入団し、現在に至る。

フィレンツェ～サンクトペテルブルク ～ 軽井沢

伏木 雅昭

チャイコフスキーの弦楽アンサンブル曲と言えば、「弦楽セレナーデ」Op.48が最も聴かれることの多い作品だと思う。それに対して「フィレンツェの思い出」Op.70はチャイコフスキー最晩年の作品で、作品の成熟度が聴く者を惹き付けて止まない弦楽六重奏曲だ。サンクトペテルブルク室内楽協会の依頼を受けたチャイコフスキーはこの作曲には苦勞したようで、完成までに何年も要している。彼が集中して作曲に取りかかったのは1890年フィレンツェに滞在してオペラ「スペードの女王」に取り組んでいた頃で、第2楽章Adagio cantabile e con motoはイタリア的なモチーフを展開させたものとされる。この緩徐楽章は中間部の場面転換を経てチェロ1による旋律へと展開する構成が美しい。しかしイタリア由来の雰囲気はそこまでで、第3楽章Allegretto moderatoに入ると一転ヴィオラ1の主題から濃厚なスラブ色満載状態となる。そして最終楽章Allegro vivaceは疾走する旋律の中でバッハ風なモチーフのやり取りも垣間見られるのがまたユニークなフーガ的構造だ。最終的にこの第3、第4楽章は全面的な手直しにさらに1年を費やし、1892年の改訂版出版に至ったものだ。

オーケストラ演奏されることも多いこの曲だが、チャイコフスキーはオーケストレーションをコンパクトにまとめたシンフォニーのように聞かれることを好まず、「弦楽器6声が独立して且つ同時に等質となる対位法音楽」を強く意識していた。まさにこのUNAMAS録音は作曲家の意図を汲んでVn1/Vn2/Va1/Va2/Vc1/Vc2の各パートソロ構成とし、さらにコントラバスを加えて低音域補強を狙っている。室内楽的演奏の密度を活かしながら、音の厚みでも引けを取らない音楽を目指したものだ。

今回の収録は2016年12月13/14日に軽井沢大賀ホールで行われた。UNAMAS Classicsシリーズがこのホールを録音拠点にしているのはそれ相応の理由がある。大賀ホールは客席数700規模の小ホールで、シューボックス型とは異なる五角形の形状から、どの客席からもステージが近くしかも概ね均一だ。そのメリットは音の粒立ちに如実に表れ、立ち上がりが鈍ることなく、くっきりと聞こえる。響き自体は豊かで、残響の減衰持続音が慎ましくも長めの存在を感じさせ、そのバランスが魅力となっている。演奏者にとっても気持ちの良い演奏ができるホールだと思う。

今回の収録プランはメイン5chのデジタルマイク（プラス0.1の補強）を円周形に演奏者が囲み、さらにサイド方向を狙う2本がステージ上に置かれ、これはDolby Atmos 7.1.4を想定したチャンネル用だ。アンビエント及び9ch mixのための高さ方向の4chは今回初めて2階席に設置された。響きの取り込みに関しては同じホールであってもいつも同じということはなく、アルバム毎に異なる狙いでチャレンジしているのがMickらしいスタイルと言えよう。

The logo for UNAMAS, with the letters U, N, A, M, A, S in a colorful, stylized font. The 'U' is blue, 'N' is green, 'A' is red, 'M' is yellow, 'A' is green, and 'S' is red. The letters are outlined in black and set against a white background with a slight drop shadow.

この作品のリリースフォーマットは今回も2chステレオ（MQAを含む）と5.1ch版になるのだが、僕はいつの日か9chミックス版が市場に登場することを夢見ており、それはMickも意識して制作面では9chの仕上げを続けている。

Mickスタジオで試聴させてもらった9chミックスも含めての印象を述べさせていただくが、田尻・竹田コンビを中心にした弦楽合奏による「軽井沢シリーズ」第4作目となる今回のアルバムでは、特に上述した響きの面で低音域での豊かさ的なものがこれまで以上に現れており、これは距離差を持たせて2階に設置したハイトチャンネル用のマイクによる効果が大きかったようだ。また音の粒立ちがしっかりと表現されている点も含め、大賀ホールのやや高めに位置する客席を思い起こさせる響きとなっている。9.1ではその響きの三次元的な浮遊感が増量されると感じた。一方、楽器レイアウトは、サラウンド再生の場合、チェロが後方に回り込む（点定位的ではない）配置になり、聴き手は指揮者に近い位置関係という感覚で、ここはホールでの鑑賞再現とは異なる仕掛けだ。ホール的な響きの中で音楽に対してはいや増しに寄って行く距離感に身を置いている自分がある。そしてその体験はめくるめく旋律の主導権がパート間で次々にリレーされていく第4楽章で充足感のピークに至る。